

言語応用コース

先生に聞いた!

英語、日本語、中国語を中心に、言葉にかかわる不思議を解明するコースです。日本語を研究する場合でも、英語や中国語といった他の言語と比較することによって新たな発見があるかもしれません。言葉を多面的に分析できるのがこのコースの特徴です。学べる分野も、語用論、意味論、統語論、言語教育、言語獲得、認知言語学と多岐にわたります。このコースは入り口が広く、かつ奥行きも深いので、言葉に関して興味がある人なら

僕は元々教師を目指していて、研究者になるつもりはありませんでした。しかし、集中講義で出会った一人の先生が僕の人生を大きく変えました。日本語と英語の比較を通して見えてくる言語の普遍性に関する講義は、僕に言葉のおもしろさを実感させてくれるものでした。この先生との出会いがなければ、今ここに僕はいないと思います。僕の研究分野は大きく二つあります。一つ目は、この30年間追いついていない英語の時制論です。どうして時制の一致が起こるのかなんてことを真面目に考えています。二つ目は、日常にあふれている言語表現の語用論的研究です。我々の日々の会話、雑誌広告、テレビCMなどで使われている身近な表現を研究対象

田中先生の研究内容

にするため、授業においても学生さんと一緒に楽しく学問できるのはこの上ない喜びです。

言語応用コース教授

田中一彦先生

言語化されないメッセージをどうやって理解するのか

村上太一さん



誰でも楽しみながら自由に研究できる場所です。ただ、自由な分、自らが進むべき道の探求に苦労するかもしれません。まさに、大学生らしい知的な生活ができる場所と言っているかもしれません。

オススメの人

チョムスキーは、母語の言語体系を短期間で習得できるのは、後天的経験に依拠しない「普遍文法」が生得的に備わっているからであるという「生成文法理論」という仮説を唱えた人物です。母語の言語習得能力は生得的なのか後天的なのか、言語応用コースに入って考えてみませんか?

卒論

- ▼日本語における“fingered speech”についての考察—LINEでの会話を中心に—
- ▼日英の役割語比較—『ハリー・ポッターと賢者の石』を題材として—
- ▼コメのネーミングに関する一考察

言語応用コースにどうして「流行」とは?

「付度(そんたく) 相手の気持ち」を推しはかること。この言葉が、今世間を賑わせている。年末の流行語大賞を取る勢いである。国会での「付度」問題はさておき、言語学の世界でも「付度」は重要なキーワードである。我々の日常のコミュニケーションにおいて、話し手は伝えたいメッセージをすべて言語化しているわけではない。話し手が、自分が言いたいことを聞き手に効率的に伝えたいのなら、そのメッセージをすべて言語化して伝えるのが一番有効である。しかし、我々のコミュニケーションはそう単純ではない。例えば、書店で「万引きは犯罪です」という張り紙を見かける。お店側の意図を効率的にお客に伝えたいのであれば、「万引きはするな」と張り紙をした方が効果的である。しかしながら、我々のコミュニケーションにおいては情報伝達の効率性よりも、「相手への配慮」が重視される。たとえ情報伝達の効率性を犠牲にしても、お客さんの気持ちに「付度」し、お客さんを犯罪者予備軍扱いする表現は避けられるのである。(文・田中先生)

フランス語圏言語文化領域

先生に聞いた!

フランス語圏言語文化領域の学びは、フランス語という一つの幹から、言語学・文学・文化・歴史・社会・言語学習・教育など、いろいろな学問分野の枝葉が出ている、というイメージです。幹が太くなるほど枝葉も茂る、ということですね。フランス語の言語学・文学はもちろん、ベルギー、モロッコ、カリブ海、ニューカレドニアなど世界中にひろがるフランス語圏のものであれば、哲学、歴史、社会、教育など他コー

フランス語圏言語文化領域

スの専門分野にかかわる研究もできるというところが、この領域の特徴です。けれど、いろいろな分野を扱いながらも、やはり根っこはフランス語圏にあります。他コースの専門分野、フランス、フランス語圏について深く学んでいることが他コースとの相違であり、学問のベースとなっています。

フランス語圏言語文化領域 3年生 南智博さん



オススメの人

僕のオススメは Christopher Nobes という会計学者です。文学部がなぜ会計? と思いませんか。実は「会計」は国ごとの歴史や文化、社会が色濃く反映されたビジネス界の「ことば」なんです! 彼はこうした切り口で複雑に入り組んだ国際経済に鋭いメスを入れています。皆さんも「語学×会計学」という視点でフランス社会を覗いてみませんか?

卒論

- ▼ボーカロイドはフランス語教育の夢を見るか? —フランス語版 VOCALOID 「ALYS」と3DCGソフト「MikuMikuDance」のフランス語学習への応用—
- ▼シャルル5世による戸別税廃止の意図

フランス語圏言語文化領域にどうして「流行」とは?

「流行」(流行) という仏語が日本でよく聞かれるほど、フランスと流行は切り離せないが、「研究」となると、柔軟な見方が必要だ。「フランスにおけるファッションの流行」というテーマはもちろんだが、先輩たちの卒業論文から、多方面から考えてみよう。例えば、社会なら「移民問題をめぐる言説にみる流行」、文学なら「バルザックの小説にみる19世紀パリのお洒落」。言語学なら「若者ことばの流行と衰退に関する仏日比較」。歴史なら「中世ゴシック建築におけるモード」、文化なら「ファッション誌とInstagramの言説分析」、言語学習/言語教育なら「グループワークにおける同一話題の継続と遷移」などなど。さらに、学びの対象は、フランス共和国にとどまらず、カナダ、ベルギー、スイス、ハイチ、北・西アフリカ諸国など、世界中のフランス語使用地域(フランス語圏)の社会、文学、言語、歴史、文化にもおおよそこの領域の多様な可能性がわかりただけだよ。(文・福島先生)

ことばは、聞き手とともにくっついていくもの

フランス語圏言語文化領域 教授 福島祥行先生



災害団によるコミュニケーション生成など、多様な対象を研究していますが、その全てに共通しているのは「コミュニケーションは相互行為(interaction)である」ということです。最近では、他者との相互行為を、どのような環境が生じやすくさせるかということに関心を持っています。

オススメの人

作家 Romain GARY (ロマン・ガリ 1914-1980)。戦時中は英雄、戦後は外交官。ジーン・セバグの元夫にして、一人一回きりのゴンクール賞を、エミール・アジャールという別名でふたたび受賞、そのことを拳銃自殺後の遺書で明かした。硬直した正義への疑問を描きつけた彼の小説は、つねに愛ゆえの不機嫌に満ちている。今年『ペルーの鳥』(水声社)、『夜明けの約束』(共和国)とたてつづけに翻訳が出た。ぜひ一読されたい。

学生から見た領域

この領域の学生は、各々がいろんな興味を持っていて、多様性があります。それだから個性が強い人が多いように感じます。毎年7月には「パリ祭」という行事があったり、学生自作の料理を持ち寄りたり、出し物や衣装をしたりします。領域の学生だけでなく、フランス語履修者や留学生も集まる、楽しいイベントです。

学生から見たコース

1回生の頃からやりたい卒業テーマがあり、それをできそうなコースが教育学か言語応用でした。しかし高校生のときから英語が好きで英語の教師志望ということもあり、一番優先したかったのが英語という言語だったので、言語なら何でも融通がきくこのコースに進みました。

コースに入ってきたきっかけ

教授ごとに言語学や言語習得などある程度違う角度から言語に取り組んでいるため、興味のある分野を見つけやすいです。ホワイトボードはチョコレットに含まれるのか? といった日常的なことを言語学的アプローチで授業をしてくださる先生もいます。コース生や先生方もかなり仲がいいです。言語に興味がある方には是非来てほしいです。